

都市病理学

——高密度社会の病理とは何か——

大橋 薫・大藪寿一編

有斐閣双書 B 6判 221頁

650円

Aさんの問題。Aさんは当年とって65才。30年前に夫を亡くし、以後、家政婦として働きながら、一人息子を育てることに唯一の生き甲斐を見出ししてきた。その息子も結婚して、しばらくAさんと別居。しかし、一年前に家を建てることにより同居。その時、Aさんが永い間、ツメに灯をともし思いで貯えてきた100万円を投資。その時の条件としては、Aさんの望み通りの一部屋が与えられることになっていたが、いざ建ってみると、Aさんの部屋は北側の、窓をあけても隣家の壁しか見えない、陽の当たらない暗い部屋。

Aさんは、毎日、不満をいい、家族に嫌味をいうようになった。その結果として、息子夫婦はAさんが精神的に異常ではないかと、保健所の精神衛生相談に訪れてきた。しかし、Aさんは何ら異常はなかった。

この問題は、今日の核家族にともなう老人の問題であり、また都市における住宅の問題であり、また、この家族を通してみる都会人の心の問題でもある。こうした都会人の心は、本書の表現によると、都市文化の病理は、すでに我々の感覚と思考と態度そのものを<不可視的に浸透>するという意味で汚染された大気以上に厄介であり、物質的空間の改善によって解消されるものではない、とされている。

日々、我々の相談室には、諸々の相談が持ちかけられる。それらの中には、個人の力では解決され得ない、都市生活をしているが故に、いいかえるならば、「都市病理」の一端がその原因となっていると思える顕著な例が多い。

古代ギリシャ時代においては、ポリスは人間の創造性の証しであった。しかし、本書によるならば今日においては、都市は受動性と無力感を、そして、破壊的能動性の

エネルギー蓄積する<匿名の悪意>と化してしまっている。また、大なり小なり都市人一般は、その人間としての存在の深部に至るまで都市文化の病理によって、犯されている。<都市病理とは>……家族問題、非社会的問題、反社会的問題、公害問題、スラムの問題等々の具体的な現象を通して、都市化の激しい発展に伴って発生する社会病理であるとされる。

小さくは家族間の問題、大きくは労資間の問題、環境不全の問題、さらにそれらの都市病理の現象の中で、徐々に犯されてゆく我々の心の問題……大都市の中で孤独と不安と疲労と焦燥感を強いられている都市人、つまり我々にとって、今ひとたび、これらの問題を直視するためにも一読をすすめる。

<衛生局保健課<医療社会事業担当>田口三枝子>

市民参加と地域政治

Participating in Local Affairs

デイリス・M・ヒル著

横山桂次・吉塚 徹訳

福村出版 B 6判 295頁

1,300円

イギリスと日本、そしてあるいはアメリカとイギリスとでは、それぞれの国の社会的風土と政治諸制度のちがいが伝統的にあり、自治体改革あるいは地域民主主義の再生という課題が内包している問題にも多くのちがいのあはることは、いうまでもない。だがこの本を通読してまず印象づけられたことは、その相違点よりも共通の問題状況である。それは、現代の工業文明の発達によって、コミュニティあるいは広い意味での人間環境に加えつつある変貌の性格がおなじものとなりつつあること、そしてもうひとつは、政治社会的なことであるが、新しい意味の官僚性<合理主義>の市民社会への浸透からもたらされた自治体の空洞化、地域民主主義の主体の衰弱ということである。著者は「日本語版への序文」の最初のところで、このことを次のように述べている。

——世界中いたるところで、市井の人びとは、自分の環